

名誉会員 石井 桂先生を偲ぶ

本会の名誉会員 石井 桂先生には、去る昭和58年
12月3日永眠されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

社団法人 日本都市計画学会

石井先生には最近は病床におられることが多かったが
突然の訃報に接し、これまでの大きな支えを失ったよう
な深い悲しみにつつまれました。

顧ると先生には荒廃した戦後の東京都の復興時代にあ
って建築局長として、率先陳頭指揮され、多くの立派な
業績を残されました。

先生は大学を出られて間もなく、あの関東大震災にあ
い本所被服廠跡で九死に一生を得られましたが、御家族
を一挙に失われ、天涯孤独の身となられました。このき
びしい試練が先生のその後の人生における街づくりまた
建築行政への執念となり、その真価を發揮されてきたものと思われます。

当時の建築界の先達として、学会やその他の業界団体
の育成指導にあたられ、特に戦後の建築基準法をはじめ
とする建築の法体系作りに熱意をもやされました。行政
の立場からではその実現は靴下搔痒の感を脱しきれず
たまたま昭和28年斯界からの出馬要請をうけ、東京地区
の参議院議員に当選されました。

参議院議員2期をつとめられた後、衆議院議員となられ、
その豊富な体験と不屈の信念をもって政界において
都市計画、建築行政——特に首都圈整備計画、国土総合
開発等々、東京の復興計画あるいは地方都市の復興計画
に対して尽力されました。

また、時代の推移と共に、新しい都市問題に対しても
都市政策調査会、公害対策特別委員会、更には自民党の
建設部会の委員として御活躍されてきました。

一方、教育に対する熱意も強く、日大、都立大、早大
等で教鞭をとられ、47年には中央工学校の校長にも就任
されるなど、後進の指導育成にも努められました。

先生のお人柄は、30年間の建築行政官として歩まれた
道を「建築のお巡りさん」と題して書かれた本のなかに
脈々として現われています。誠に正直な方で、怒る時は
烈火の如くとでも申しましようか、また一面、大変ユーモラスなところもあり、人情こまやかな方であります。



テーブル・スピーチは仲々粹なもので、絶品でありま
した。しかしあら再び拝聴することはできません。

今、私共後輩の胸のなかには、先生の数々の教えが消
えることなく受け継がれ、永遠に残ることを信じ、御靈
にむかって心から御冥福をお祈りいたします。

本会元理事、(社)東京建築防災センター

理事長 堀内 享一

略歴

明治31年8月21日 東京に生まれる。

大正12年 東京帝国大学工学部建築学科卒業、警視庁建
築課に入庁。

昭和23年 東京都建築局長

同 27年 工学博士

同 28年～30年 日本建築学会会長

同 31年 石井桂建築研究所設立

同 31年～43年 東京建築士会会長、日本建築士会連合
会会長、以後、各会の名誉会長

同 47年～51年 中央工学校校長、以後名誉校長

同 48年 日本都市計画学会名誉会員

参議院議員2期、衆議院議員1期、勲
二等瑞宝章

先生は明治31年（1898）埼玉県に生まれ、一高を経て大正12年東京帝国大学建築学科を卒業後警視庁に勤務され、建築課長の後内務省で防空関係の仕事を終えて再び東京都へ戻られ建築局長を最後に国会に出馬された。

参議院議員二期、衆議院議員を一期つとめられている。その間「工場建築に関する研究」で工学博士となられ、日本建築学会長を初めとする数多くの要職に就かれている。

大正12年の関東大震災で母と弟、妹を亡くされたため、木造都市の改造を中心とする都市防災を一生の仕事とすることを誓ったと生前よく言っていた。中学の同期に浅沼稲次郎さん、岸田日出刀さん、田谷力三さんがおられ、存命中はよく交際されていたようだった。私は先生が警視庁の建築課長当時採用され、その後国会に选られるまで、ずっと上司として仕えてきた。次にその間記憶に残っている「エピソード」を述べてみたい。警視庁時代には午後暇があると課長室から一般事務室へ出てこられ、得意の雑談などで課員を笑わせるなど屈託がなく部下への面倒みがよかったです。宴会での座持が上手で、木やり音頭を歌い、庶民的で特に大工、左官などに人気があり、これが国會議員に当選できるもともなっているものと思われる。戦後の建築資材の配給統制時代に戦災復興院の東京出張所長を兼務され、所長室には毎日多

くの陳情人が見えたがよく捌いておられた。

当時私と所長との間に密約があって、陳情人が私の所へ持つてこられる名刺の添え書きの下に石井という判が押してあって、それが正確に押してあれば、陳情を受け入れ、上下逆に押してあれば「断れ」、斜ならば適当に扱えとの暗号が決めてあった。こうでもしなければ毎日数十人の陳情人のため部下を所長室に呼んでいたら仕事にならないことをよく知っておられた上での処置であった。

想い出としては、議員になられてから毎年1月2日に役所時代の旧部下が約15年にわたって浦和のお宅に伺って新年のご馳走になっていた。田中角栄元首相とは中央工学校時代の師弟の関係で、石井先生のご子息、ご息女全員の結婚の仲入をされている。首相の時も多忙の中にも拘わらず約束通りされたことには、さすがと感心させられた。又国會議員選挙に際しては派が異なってはいたが、必ず応援演説をされ、葬儀にも委員長として列席させていたのが印象深かった。

大河原 春雄

(東京理科大学教授)

